

## 古代ギリシアにおける嘆願について

——ギリシア悲劇を中心に——

久保田 忠利

古代ギリシアにおける「嘆願」*ἰκεσία*（ヒケシア）あるいは（ピケティア）とは、叙事詩にも既に見られるように、古くから行われていた慣習で、ほかに取るべき手段を持たない者が、自分より大きな力を持った人間の膝に取りすがり頸に手を触れて援助や保護を乞うことを意味する。嘆願者はゼウス・ピケンオス（嘆願者を守るゼウス）の庇護の下におかれ、嘆願者（たち）の願いを拒んだり身柄に陵辱を加えたりすることは、ゼウス・ピケンオスによる報復を招くと信じられていた。嘆願者は、彼（彼女）自身まったく無力であるにもかかわらず、畏れはかかるべき存在、いわば神的な不可侵性を備える存在と見なされたのである。

「嘆願」はさらに、当時の一種の社会的慣習として、何らかの迫害を受けている者あるいはそれを恐れる者が、神の聖域や祭壇に逃れて援助や保護を求めるなどを指すようになる。支配者はそ

の種の嘆願者が現れた場合、その取扱いをめぐって宗教的・政治的問題に直面する。ゼウス・ピケンオスを敬い、嘆願者を保護しようと思えば、引き渡しを求める者との戦争に祖国を巻きこまさるをえないというディレンマにおちいるからである。後者はギリシア語でアシューロン *ἀσύλον* あるいはアシューリア *ἀσύλια* と言われるもので、現在一般にドイツ語でアシール *Asyl* ないし *Asylrecht*、英語で *asylum* と呼ばれているものの祖型である。本報告では、主として後者について検討する。おもに前五世紀のギリシア悲劇にみられる様々な嘆願場面を取り上げて、この状況において生じ得る諸関係を具体的に考察してみることにする。

アイスキュロス『ピケティデス——嘆願する女たち』では、五〇人のダナオスの娘たちが従兄弟に当たるアイギュプロトスの五〇人の息子たちとの結婚を忌避し、父ダナオスとともに、エジプ

トから先祖の出身地であるアルゴスへ逃れてくる。コロス（合唱隊）

を形成するダナオスの娘たちは、嘆願者の徴である羊毛を卷いたオリーブの小枝を左手にして、「一つの祭壇に祀られる神々の、この壇に取りすがって坐る（一八八一八九）」ようだとの父の指図に従い、アルゴス王ペラスゴスに対し、身柄の保護を求める。

合唱隊の長「アイギュプトスの息子らが求めて、わたくしどもを引き渡したりなさらぬことです。（三四一）」それはダナオスもその娘たちも「祭壇は、城塔にまさる守り、けつして破られぬ盾（一九〇）」であり、「戦に追われてきた者にも、祭壇は、禍を防ぐ手だてとなる。神さまがたも、それにすがる者を蔑ろになさらぬはず。（八二一八四）」であつて、嘆願者の願いが聞き入れられずに、祭壇から暴力的に追い払われた場合「嘆願者を守るゼウスのお怒りは、すさまじい。（三四七）」と信じているからである。他方、王ペラスゴスも同じくその信仰と慣習を共有着している。<sup>(3)</sup>

王「わたしは恐れ戦くのだ、小枝で陰るその嘆願者の座を見れば。（三四五）」

また、ダナオスの娘たちはペラスゴス王が絶対的権力をを持つとみなし嘆願しているが、王は、娘たちの要求をかなえることは、アイギュプトスの息子たちとの間に「新たに戦を起させ」（三四一）ということを意味することを承知しているため、嘆願者のためを語り戦いを起こすことを彼の一存で決定することはできない

と言う。

王「市民に詰らざるに、そのことを行うわけにいかないのだ、たとえわたしにその権限があつても。それは、何か事が起つたときに、市民たちに、こう言わせないためだ、「お前は、他所者を大切にしたあげく、国を滅ぼした」と、（三九七一四〇一）」

王は、自國を他国との戦争に巻き込むことを覚悟で嘆願者を守るべきか否か、市民の同意が得られるか否か、苦慮しなければならない立場に追い込まれる。なかなか決断できずと思いつむ王に對してダナオスの娘たちは、その場で首をくくり自殺すると誓す。<sup>(5)</sup> 祭壇を血あるいは死で汚すこととは神を汚すことであり、どうしても避けねばならないことである。たとえ、自殺であろうとそれは嘆願者の嘆願が拒まれた結果であり、祭壇を汚した責めは嘆願を受け入れなかつた側にあることになるという論理である。王は結局「嘆願者の神ゼウスの怒りを、畏れ憚らずにはおられない。死すべき人間にとって、それより恐ろしいものは、ほかにないからだ（四七八一四七九）」と結論し、市民を説得することを決心する。この場合、王自身が慣習の根底にある宗教感情を共有しているため、政治権力と宗教的権威は対立するのではなく、むしろ後者が前者を包摂しているように見える。それに対し、やがて娘たちを追つてきたアイギュプトスの伝令使は「ナイルの辺の神々を崇める者（九二二）」であると宣言し、ギリシア人の慣習にとらわれず、力ずくで娘たちを祭壇のところから引き立てようとする。<sup>(6)</sup> そこへ駆けつけた王は、「ご婦人がたの一行を、その意志に反して、決

して引き渡しはせぬ（九四三—一九四四）』という市民が全員一致で下した決議を盾に、それを阻止する。伝令使は「新たに戦争を始めること（九五〇）」がもはや避けられないことを予告する。これに続く失われた作品で、おそらくペラスゴス王は戦死するものと考えられる。<sup>(7)</sup>

ここには嘆願という慣習の基本的要素が見られる。弱者としての亡命者、嘆願のシンボルであるオリーブの小枝、保護空間としての異国の祭壇、嘆願者を守る神への畏れ、権力者による嘆願者の受け入れ、嘆願者の引き渡しを要求する迫害者、その結果としての武力衝突などである。また、王はいざれを選択しても破滅につながる二つの危機に直面するという悲劇的典型的なパターンを示している。

類似の状況はエウリーピデース『ヒケティデス』に見られる。テバイ戦争に勝利したテバイ側は、七人の将軍を含め戦死したアルゴスの兵士たちの埋葬を禁止する。破れたアルゴスの王アドラーーストスと戦死した七人の将軍の母たちがアテナイ郊外にあるエレウシスのティーメーテール神域にやって来る。嘆願の徵であるオリーヴの小枝を手に祭壇の傍らで嘆願者となり、テバイとの遺体返還交渉をして欲しいとアテナイに仲介を頼む。アドラーーストスの嘆願をきいたテーセウスは、アルゴス軍の遠征は、予言者の伝える神の言葉に耳を傾けず、若者たちの熱気に押されて分別をなくして起こしたものであり、權力や利益を目当てにしたもので正義（大儀）を欠いたものであ

つた、と判断し、嘆願を受け入れることを拒む。<sup>(8)</sup>

しかし、テーセウスは、母アイトラーに、戦死者の遺体を埋葬することは当然の務めであり、ギリシア全体の決まり（ノモス）であるからそれを守るために戦いを避けてはならないと助言され、嘆願を受け入れる（一九七—三三一参照）。死体の引き渡しを拒むテバイの國の使者は、「嘆願の小枝の持つ聖なる力などは放っておいて（四七〇—四七一）アドラーーストスをアテナイから追放するよう要求する。テーセウスは武力を行使し、アドラーーストスの要求を叶える。

母親の介入により拒否された嘆願が受け入れられるのは特異な点であり、嘆願の慣習において女性が重要な役割を演じていた可能性を想像させる。受け入れた理由としては、死者に埋葬を施すことがギリシアの決まり（ノモス）であること、その決まりを守らせる上で大きな名譽（ティーメー）が得られることが繰り返し強調されている。<sup>(9)</sup>嘆願者が儀礼的に手に持つ羊毛を巻き付けたオリーブの小枝には嘆願される者を拘束する力を持っている。<sup>(10)</sup>小枝はシンボルとして慣習の力を示しているものと考えてよい。<sup>(11)</sup>

一方、アドラーーストスは、かつて幸運に恵まれた王であったのに、白髪の老人となつて地にひれ伏し膝にすがるのは「恥さらし」だと自覚している（一六四—一六六参照）。嘆願者になるには誇りを捨て自己を卑下し、無力であることを言葉と行為で明白に示さねばならず、この屈辱を甘受することが庇護を得る

ために支払う心理的代償である。それゆえ、嘆願を拒まれたとき、神々を証人にするため小枝を残して立ち去らうとする。

アドラーーストス「お願いに上がったのは、失敗を裁いてもらうためでもなければ、懲らしめられたり、あれこれと非難しても

らうためでもなかつたのだ。・・・・さあ、年老いた母たちよ、帰ろうではないか。つややかな緑のオリーブの先に羊毛をかざした小枝をこの場に残して、神々、大地、松明をかざす女神デ

リメー・テール、そして太陽の神それぞれに、明かして頂こうではないか、神々に対するわれわれの祈願が無駄に終わつたことについては。(二五三—二六一)」

拒まれた嘆願者は拒んだ相手を非難する権利を留保することになる。

嘆願が慣習として成立し強固に存在することによって嘆願を受ける者は、受け入れれば名譽、拒めば不名誉という関係のうちに必然的に取り込まれることになる。嘆願者の方はそれを慘めな境遇の者たち(弱者)<sup>(13)</sup>の当然の権利とみなす。

コロスの長、獸にも避難のための岩棚があり、奴隸にも神々の祭壇があり、國も危難に襲われたならば、別の國の保護を求めるもの。(二六七—二六九)」

『ヘーラクレイダイ——ヘーラクレースの子供たち』の場合。ヘーラクレースの死後エウリュステウス王に迫害され、命を狙わっているイオラース(ヘーラクレースの甥)はヘーラクレースの子供たちと一緒にマラドーンのゼウスの祭壇に嘆願者として坐り込

む(三三一行以下)。エウリュステウスの使者が現れ祭壇にいるのもかまわずに暴力的に引き立てようとして、イオラーオスを突き倒す<sup>(14)</sup>。騒ぎをきて駆けつけた土地の王デーモボーンに対し使者は自分の行動には十分な根拠と権利があると次のように主張する。

使者「アルゴス人である私自らがこのアルゴス人たちを連れて行こうとしているだけだ。わたし自身の國からの逃亡者であり、かの地の法によつて死罪の評決を受けたこの者どもを捕まえていくところなのだ。自分の國に住んでいる私たちが、己が主權を持つ法の裁きを行使することになんの誤りもあるまい。彼らが他の諸々の祭壇を頼つて行つたときにも我々はいまの言葉と同じ言い分を主張したが、だれも自分自身の禍を敢えて我が身に招くような真似はしなかつた(一三九—一四〇)。」

どちらもが自國の権利を主張する外交問題では、祭壇は二つの側面を持つことになる。

デーモボーン「神々の座所はすべての人々に共通の砦だ」(一五九—一六〇)

デーモボーンが嘆願を受け入れるのは、第一にゼウスをはばかること、第二に彼の父テーセウスとヘーラクレースの血縁関係および父が受けた恩義、第三に特に自由な土地の支配者が自分の國の祭壇から暴力的に嘆願者をつれ去られてしまうことにたいする廉恥心である<sup>(15)</sup>。戦争の危険を犯して嘆願者を保護することは、神を敬い、正義を守ることであり、そして自由を誇る人間と國に

とつて避けることのできない大きな試練、すなわち主権を守るために代償であることが自覚されている。従つて、嘆願者を受け入れることに対し王は少しも躊躇することはない。

ところで、本劇における王のディレインマは、戦争の勝利のためには「高貴な父親を持つ乙女をデーメーテールの御娘コレーに捧げよ」という神託が下されたことで生じるのである。王は自分の子供を殺すつもりにも、市民の子供を無理やり殺すつもりにもならない。国家の威信と主権を守るという戦争の公的性格に、だれの子供を生け贋にすべきか、という極めて個人的性格を帶びた要素が入り込む。このディレインマは、ヘーラクレースの子供たちの一人、娘マカリアードが自らすすんでその犠牲を引き受けることによって解決される。彼女の動機は、自分の命ばかり大事にする卑怯ものだという非難を恥とする、高貴な生まれの娘としての誇りである。<sup>[16]</sup>嘆願者として受け入れられたマカリアードが生け贋になる（一種のバルマコス・スケイプゴート）ことにより国家を救う（自分の仲間を救うためには國家を救わねばならない）のは、弱い無力な存在と見なされていたものが非常に価値のある贈り物に変わること例と考えられる。嘆願者は、嘆願者になると自体で保護者に名譽を与える存在になるが、実際には、受け入れてくれた共同体に対し具体的な利益を還元することが暗黙のうちに要求されるのかもしれない。

このような変化をする典型的なものとしてはソポクレースの『コローノスのオイディプース』を考察する必要がある。父を殺

し母と交わったことが明らかになつたオイディプースは、国を追われ、娘と放浪しながら老年を迎える。アテーナイの郊外の村コローノスにあるエウメニデスの神域にたどり着く。そこは彼に下された神託が彼の終焉の地と告げたところである。エウメニデス＝エリニュエスの神域は「足を踏み入れてはならない神聖な場所（三七）」、「足を踏み入れてはならぬ森（一二六）」であり、土地の人たちは「その名を口にするのも身が震え目をそらして、声にも言葉にも出さずに無言のうちに、崇めながら通り過ぎる（一二九—一三二）」所である。そこへ流れ者のオイディプースが嘆願者（四四）として入り込む。オイディプースの素性を知り恐れる土地の男たちに向かって「わたしは神聖な者、敬虔な者として、この市民に益をもたらす者として、やつて来たのだ（一八七—二八八）」と語り、「見苦しい顔（二八六）」のせいで追い払わないでくれと頼む。この地を支配するテーセウスは、異国での苦難の体験から嘆願者を退けるつもりがないこと、彼が死後にアテーナイに利益を与えると約束したことを聞き、彼にその地に留まることを許し、身の安全を約束する。クレオーンがオイディプースを無理矢理テーセウスへ連れ戻そうとして、娘アンティゴネーを人質にすると、テーセウスは「わたしが暴力に屈したと、この客人から嘲笑いの種にされぬよう（九〇一—九〇三）と、武力を行使して娘を取り戻し、誓いを守る。オイディプースが昇天すると、彼の聖なる墓は近づくことも、声をかけることも許されない場所となる（一七六一一—一七六三）。誰もが触ることを恐れる汚れた存在

であり、無力な老人であつたオイディープースは受け入れた者に保護を与える聖なる存在へと変化する。

この変化をどのように考えればよいのか。テーセウス（アーテナイ）は、普通はクレオーンが語るように「父親殺しで、しかも母子の瀕死の結婚をしているのをあばかりたような汚れた男を受け入れるはずがない（九四二一九四六）」し、「こんな浮浪者がこの国の中に住むのを許さぬはず（九四八一九四九）」であるのに、あって嘆願者を受け入れることで、アーテナイが敬神の念に厚いこと、弱者の救済者であるという名声を実証し、名誉を守ることが

できる。嘆願する者と嘆願を受け入れる者との関係は、贈与者と被贈与者のそれであり、嘆願者は自分の身体を贈り物として与えそれを贈り物として受け取った者は返礼に保護を与える。この交換においては、しかし、通常の等価物による交換とは異なり、贈り物の価値が低いほど（すなわちその身体が無力なほど、汚れていればいるほど、受取る者が一般にできるだけ受取を拒否したいと強く思う状態にあるほど）その贈り物の受容と共に受け手に生じる価値（敬虔、寛大、同情心などに関する評価）は増大する。エウリーピデース『ヘーラクレース』。ヘーラクレースが冥界へ降り、消息不明になつてゐる間に、彼の父アムピトリュオーン、彼の妻メガラ、彼の子供たちは、成り上がり者の王リュコスに命を狙われ、テーバイの「救いの神ゼウスの祭壇に取りすがつてゐる（四八）」。彼らは一切を絶たれてじつとしており、「食う物も飲物も身に着ける物もなく、地面に何も敷かずにからだを横たえている（五一五三）」。リュコス王は、祭壇の周りに薪を積み上げ、火を付けて焼き尽くすように命じる（一二四行以下）。メガラは、「敵の笑いものにされるといふ死に方は避けるべき（二八五）」だと考へ、リュコスに、子供たちに死装束を着ける許可を得て、皆祭壇を離れる。その後ヘーラクレースが帰還してリュコスを殺し家族を救う。祭壇は迫害者の直接の暴力を防ぐ力はあるが、迫害者の度合いが克服すべき危険の大きさに比例するのと同じである。このように両者の関係には、特殊な贈与関係が付随していると解

釈することも可能であると思われる。嘆願者の持つ負の価値の大きさによって保護者のプラスの価値は規定されることになるので、逆に負の価値の大きな嘆願者を拒絶することはそれだけ大きな「恥」をかくことを意味し、「恥の文化」においてはそのような嘆願者を喜ばしい贈り物として受け入れざるを得ない状況が生じると思われる。

以上は異國から嘆願者が保護や援助を求めてきた場合であるが、次には、自分の居住している共同体の中で迫害を受け、祭壇に避難する場合を見てみる。

エウリーピデース『ヘーラクレース』。ヘーラクレースが冥界へ降り、消息不明になつてゐる間に、彼の父アムピトリュオーン、彼の妻メガラ、彼の子供たちは、成り上がり者の王リュコスに命を狙われ、テーバイの「救いの神ゼウスの祭壇に取りすがつてゐる（四八）」。彼らは一切を絶たれてじつとしており、「食う物も飲物も身に着ける物もなく、地面に何も敷かずにからだを横たえている（五一五三）」。リュコス王は、祭壇の周りに薪を積み上げ、火を付けて焼き尽くすように命じる（一二四行以下）。メガラは、「敵の笑いものにされるといふ死に方は避けるべき（二八五）」だと考へ、リュコスに、子供たちに死装束を着ける許可を得て、皆祭壇を離れる。その後ヘーラクレースが帰還してリュコスを殺し家族を救う。祭壇は迫害者の直接の暴力を防ぐ力はあるが、迫害者の度合いが克服すべき危険の大きさに比例するのと同じである。このように両者の関係には、特殊な贈与関係が付随していると解釈させらる力はない。祭壇は一時的な避難場所として救援者が出

現するまでの時間稼ぎの機能をはたしている。

### 古代ギリシアにおける嘆願について

エウリーピデース『アンドロマケー』においても類似の状況がみられる。トロイアの王子ヘクトールの妃アンドロマケーはトロイア陥落後夫を殺したアキレウスの息子ネオブトレモスの奴隸となり、愛妾となる。ネオブトレモスの正妻ヘルミオネー(メネラーオスの娘)は、自分が夫に疎んじられ子供ができないのはアンドロマケーの呪いのせいであり、自分を追い出し家を手にいれようとしている、と考え、父メネラーオスと共謀しアンドロマケーを殺そうと企む。アンドロマケーは女神テティスの社に逃げ込み祭壇にすがっている。ヘルミオネーは火責めにする、身体を傷つけると脅迫するが、アンドロマケーは自分の死は恐れず祭壇を離れようとしない。メネラーオスは匿わっていたアンドロマケーの息子を連れだし、息子を救いたければ社を離れると脅迫する。<sup>(21)</sup>ここでは嘆願者が、自分の命か、息子の命かの二者择一を迫られる。祭壇を離れたアンドロマケーを捕らえ、縛り上げると、メネラーオスは子供の命を助けるというは單なる策略で、子供の生殺与奪の権利はヘルミオネーにゆだねるという。<sup>(22)</sup>アンドロマケーはその後、夫の祖父ペーレウスの手で救われる。ここでも祭壇は一時的避難所であり、迫害者が嘆願の当の相手であるため、嘆願は無効であり、直接的暴力を一時的に阻止する力しか持たない。迫害者は嘆願を拒否すること自体にはなんの疚しさも感じないし、恥の観念も持ち合わせないし、不敬だとも思わない。迫害者は、祭壇に触れているあるいは聖域内にいる嘆願者に直接触れ、暴力を

行使することは控えるが、祭壇を離れさせるためにあらゆる手段を行使する用意がある。嘆願者にとっては祭壇(聖域)はそれに触れているあるいはその内部にいる間だけ有効な保護力のある空間となる。<sup>(23)</sup>

それが極端になれば、ゲーム的要素が生じる。『ヘーネー』では、難破して乞食同然の姿で登場した夫メネラーオスを見たヘーネーは、夫と気づかず彼女の身を守ってくれる祭壇代わりの墓へ慌てて走りようとする。

しかし、嘆願者が殺人未遂の犯罪者である『イオーン』においては、犯罪者が保護されるという反徳的結果を生じることになるため、このゲームの規則自体が妥当か否か問わることになる。実の息子とは知らずにイオーンを毒殺しようとして失敗したクレウーサは、祭壇に坐り込む。<sup>(24)</sup>イオーンは「祭壇から降り、神聖なる場所を離れなさい(一三〇六)」と言うだけで、手出しをできない。イオーンは善人にも悪人にも聖域が保護空間になることの不条理を嘆くことになる。

イオーン「なんということだ、情けない、神様は人間どもに、なんという拙い法規をお定めになったものか、まるで理屈に合わぬではないか。そもそも悪人どもを祭壇に坐らせるなども? ての外、追い出さねばならぬはずではないか。邪惡な手で神々のものに触れるのは間違っている、心正しい者が迫害された時にのみ、聖所に坐り込むのが許されるべきで、善人も悪人も同じようなやり方をして、神々から同等に扱われるのは筋が通ら

ぬ。(一三一一一三一九)」

ここには、おそらく、実際に犯罪者が祭壇や聖域に逃げ込み、そこを離れぬ限り容易には手が出せない状況が反映されているだらう。ヘーロドトスやトゥーキューディデースの伝える政治的事件には陰謀に失敗した一味が祭壇に逃げ込んだ例がいくつか見られる。また、追求する側が飢餓で苦しめたり、火を放つ例も見られる。祭壇に絶る異国の嘆願者は受け入れねばならないとする慣習は、

ゼウス・ヒケシオスを始めとする神々に対する人々の教神の念、すなわち宗教的意識と感情に基づくものであり、政治的権力者が敬虔であろうとする限り、受け入れを強制する力を持つ。同時に、名譽と名声という利益をもたらす。しかしこの慣習を維持するためには、保護に必要な力、武力と資力を要求されるし、時には自らの命を賭けねばならない事態も生じる。人間の運命や幸福の不安定さ、神々は権力者の思い上がり(ヒューリス)を罰するとする信仰、名譽や名声によって後世に名を残すことへの執着、恥を重んじる精神(恥の文化)、このようなギリシア人の世界観、運命観、人生観、価値観、倫理観によって、この慣習は支えられている。悲劇、特にエウリーピデースの作品の中にしばしば取り上げられていくのは、嘆願という状況が対立と葛藤を含み、劇的状況を生みだしやすいことにもよるであろう。だがおそらく、この慣習がギリシア人の社会的意識の中に深く根を降ろしており、それが

当時の社会的政治的状況の中で危機に見舞われていたことを反映しているものと思われる。<sup>(28)</sup>トゥーキューディデースはケルキュー

ラの内乱についてほぼ次のように記している。「民衆派は、敵対派を次々と処刑した。ヘーラー神殿にいた貴族派の嘆願者の内約五〇名を裁判に付すと約束して聖域から立たせて、彼ら全員に死刑の判決を与えた。説得に応じなかつた嘆願者たちは神殿から出ず、その場で互いに刺しあがえたり、木の枝で首を吊り、その他手段で自殺した。・・・神殿に絶るのを無理矢理引き出されたり、その場で殺されたり、ディオニュソス神殿の中で壁に閉じこめられて死んだ(三巻八)。」

内乱による権力闘争では党派の利益が最優先され、残酷行為に対する歯止めを失い、嘆願という慣習が無視され、正義が踏みにじられる。内乱の描写でトゥーキューディデースがことさら嘆願者の殺害行為に触れるのは、何よりもその慣習がギリシア的諸価値を体現する美德であり、それを踏みにじることは道徳的退廃であると意識しているからにほかならない。エウリーピデースもまた、同じことを感じていたにちがいない。悲劇においては、嘆願という慣習は権力の乱用を抑止する力を持つべきものと考えられており、支配者(たち)、権力を持つものたちが正義を重んじ、正義に則って行動しているかどうかを明確に示す試金石として劇中に組み込まれているものと考えられる。

注

(1) 岡道男「『ヒケティディス』解説」(岩波書店版『ギリシア悲劇全集』II巻)三四九頁以下、拙稿「ギリシア悲劇用語

解説」所収「嘆願劇」の項(『ギリシア悲劇全集』別巻)

六一頁参照。

(2) cf. Ellard Schlesinger: *Die griechische Aystie*. Gies.

sen | 九三三〇。云々の讃謗とおこな特に注記して、だんだん  
場合ども J. P. Gould, *Hiketeia*, JHS 丸 (一九七〇),

七四—一〇三〇。ओス B. Vickers, *Towards Greek Tra-*

*gedy* (London, 一九七〇), Chapter 8 Helplessness and

power in Greek tragedy: suppliant, protector: oppressor, revenger' からの多くの示唆を受けてしる。

(3) なお四七八行以下参照。

(4) 合唱隊の長「あなたこそ国家、あなたこそ民草の声、誰

からも統制をうけぬ長として、國の祭壇も龕も、お治めに

なります。あなたお一人がうなぐくならば、事が決まる、

あなたお一人が、王笏をゆるし、王の座を占め、万事をな

しとばられます。(三七〇—三七四)

(5) 合唱隊の長「この神々の像から、大急ぎで首を吊つて下

がることができるや。(四六五)」

(6) 伝令使「容赦なく髪を引っ掻んで引きずりて行くからな

(八八四)」、伝令使「諒めておとなしく船のところへ行か

な」と、せいかく仕立てた衣が、情け容赦なく引き裂かれ

るや。」合唱隊「・・・もう抵抗できません(九〇〇)—一九〇

(7) 岡、前掲書三五九頁以下参照。

(8) テーゼウス「トルコ人のすべてを遠征に駆り立てたと  
きには予言者の伝える神の言葉には耳を傾げず、強引に神  
々の心を無視し、國を滅ぼす結果となつた。それも、若者  
たちに引きずられるままであつたからだらう。あの連中は、

人からちやほやされると有頂天になり、大儀もなしに戦争  
を重ね、隣人を滅ぼしてゆく。彼らの抱く狙いとは、ある  
ものは将軍になりたいとか、あるものは権力を手中にして  
わがままをしたいとか、また別の者はひととま当てたいと  
かいろいろ。(一一九—一一九)

(9) cf. Thuc. 1巻IIIK. Gould, op. cit. p. 九八  
(10) アイトラー「これ(酷い日)にあつた人々のためにはあえて手を貸すこと)によいでどれだけの名誉が与えられるかを・・・ギリシア全土に認められたきまりが破られるのを防いでほしい。ところは、このよくなきまり(ヘヤス)

を正しく守つて行けば、それこそが、人の世を一つにまとめて得るものだから。(一一〇六—三一)」/ テーゼウス「ただ

戦死者の亡骸を弔うことを当然の務めとして要求している

のだ。つまり、ギリシア人全体のきまり(ノモス)を守る

ためである。(五一五—五一七)」/ テーゼウス「神々の定めたきまり(ノモス)が、このバンティーオーンの国とこ

の私に委ねられながら破られてしまつたと、ギリシア人の間に噂されるようなどとはさせないから、そのつもりでい

るようだ。(五六一—五六二)

(11) アイトラー「鎌なら枝葉のいましめに縛られている  
(一一一)」/ テーゼウス「母上のまわりから、あの神聖な嘆願の小枝を外してもいいのか。(一一五九—一一六〇)」なお、

小枝がシンボルとして持つ力について、Vickers, op.  
cit. p. 四四五参照。

(12) 小枝の使用の起源と意味については、ブルケルト著橋本  
隆夫訳『ギリシアの神話と儀礼』(リブロボート、一九八

五) 六六一六八頁および同個所の注参照。

(13) なお、動物にも避難すべき聖域があるなどない」と云つて、

(17) テーセウス「このわたして、自分でも、あなたのようだ、

トは Aelianus, *De Natura Animalium*, XI, トーチ参考。

(14) イオラーオス「私たちはアガラのゼウスにお縛りして、いるのに暴力を受けています、そして捕げものまでも漬され、ています(七〇—七二)」、ローブの「誰のためにこんな惨めな姿で地面に倒れておられるのか?」イオラーオス「おお、アテーナイの皆さん、この男があなた方の神々を侮ってゼウスの祭壇の前から私を無理やりに引きずつてこようとするのです。」(七七—七九)」(なお七五—七六、一〇一—一〇四、一一七一一九行参考)

(15) イオラーオス「お前(アルゴス人の使者)の言い分を認めて人々が採決を下すようならば、このアテーナイはもはや自由な国とはいえない。だが私はこの人々の気性と性質を知っている。彼らはむしろ死を望むだろう。恥の観念は優れた人々にとっては生よりも大切なものだから。」(一九

(18) オイディップース「アテーナイこそ最も敵神の念が厚く、

虐げられた他國の人を救う」とのやきる唯一の町、庇護することのできる唯一の町(二二〇—二二二)」

(19) オイディップース「わたしはこの哀れな身体を、あなたへの贈り物にしようとやって来た。見た日には、ぱっとしないものだが、これでも、美しい姿にまさる利益となる。」(五七六—五七八)」

(20) 嘘顎者を火責めにした実例については Herod. 六巻七八—七九参考。

(21) メネラーオス「この女神の境内から立ち退くのだ。もしにしておいてその方たちを助けることができながら、死がないように逃げてみるとしたら……それでは笑いものになってしまいます……卑怯者と思われてしまします……」

(22) マカリアー「自分たちだけは他人にその苦勞を任せっきりにしておいてその方たちを助けることができながら、死がないように逃げてみるとしたら……それでは笑いものになってしまいます……卑怯者と思われてしまします……」

(23) オ前たちは何故この土地にやつて來たのだ、嘆願者の若枝を携え自分の命ばかりを大事にして……(五〇三—五

三四)」なお、嘆願と恥の觀念の関連については Gould,

op. cit. pp. 八五—九〇参考。

(24) ゲーム的要素については前注 Gould 参照。

(25) ベルネー「全速力の若駒のようだ、ベッカベ神に従う女のように駆けて墓にすがりなくしては。(五四三—五四五)」

「いの男じやれあわねて、墓の廻へ行かねだ。」(H.H.1)

「もう足はとめだ、たしかにいの場所にすがる。」(H.H.1)

(26) ハロベ「神様におすがりした者を殺すことは許されませぬの。(一一五六)」「たとえこの場(祭壇)でお果てな

やれぬらむか、あなたに手をかけた者たまに血の汚れを負わせいやれおこなふ。(一一五九—一一六〇)」

(27) 例えば「トゥーキューディース一巻一一六、一一一—一一  
(cf. Herod. H.卷七)」。キヨローンの一昧は独裁政権を立てぬまゝアクロボリスを占領するが、包围される。

食料と水を絶たれ餓死者も出て、残りの者は祭壇(Herod. では神像)にすがる。警備のアーナイ人たちは神殿が死者で汚されるのを見て、決して害を加えないと約束して、

一味を嘆願の座から立たせ、外へ連れ出してから彼らを処刑した。一味の中には刑場に連れて行かれる途中でエウメニデスの祭壇に縋つて命乞いした者もいたが、責任者である九人の執政官は容赦しなかつた。このため、九人の執政官とその子孫は神の呪いを受けた者、神聖を蔑ろにした者という汚名を受けた。/トゥーキューディース一巻一三四。ラケダイモーン人ペウサニアースはペルシア王と組み、ギリシアの支配権を狙う。陰謀が露見するとペウサニアースはカルキオイコスの女神(アテーナー)の神殿に逃れた。追手は隠れている部屋の屋根天井を剥ぎ、扉も外して包围し、飢餓状態に追い込み降伏させた。まだ息のある内に神殿がひびあがてた場で殺した。

(28) cf. Gould, *op. cit.* p.101. "supplication... was becoming increasingly a ritual whose binding force was weake-

ning in face of the counter-strain of political realities.

(典説) 神靈かみの元用なやぐ『ギリシア諸國全集』巻一

一一卷』(新波書店、一九九〇—一九九一年) 所収  
の語じよじよじよ。